

[ゲンロク]

2021
AUG
No.426
8
定価 998Yen

GENROCK

Lamborghini

Forever

ランボルギーニ こそすべて

[公道レーシング]

ウラカンSTO日本上陸

[ミッドシップ再検証]

ウラカンEVO &
EVO RWDスパイダー

アヴェンタドール
SVJロードスター

[レジェンド対決]

カウンタックLP400 vs
ミウラP400 SV

ロールス・ロイス / 日産GT-R
BMW 特選ショップ

[The World of Bentley]

最新ベントレーの世界

[最速セダン研究]

新型BMW M3の進化を探る





シンプルに徹したオールブラック仕上げで差別化を図るのは、決してたやすいことではない。計算尽くのコーディネートにより、そうした難題をクリアしたBMW X7は、確かな存在感を放っていた。

HYPER FORGED MACARS HF-LMC for BMW X7 xDrive 35d M-Sport



↑エッジ部分にマシニング加工を施すことで、抑揚の付いたフォルムに仕上げられた。見る角度や光の当たり方で様々な表情を見せるのもHF-LMCの特徴のひとつ。ハイエンドクラスに相応しい上質さとアグレッシブな力強さを見事に両立している。

上級コーディネート の神髄

さりげなく主張する引き算の美学

てあげられたら最高である。

そんな欲張りな理想を叶えてみせたのは、兵庫県姫路市の「MACARS (メイカーズ)」だ。ドイツ車をメインとしたカスタマイズを手掛ける同店では、Make Up Car Styler をモットーに、ユーザーとデイスカッションを重ねながら、オーナーの理想を叶えていく。このBMW X7についても、ユーザーの意向を汲み取りつつ、トータルプロ

デユースが行われた。

注目すべきは、圧倒的な重厚感だ。17Dアラインメントにより低く構えたフォルムが、並々ならぬ迫力を醸し出す。引き算の美学ともいえるようか。グリルやモール、ガーニッシュといったメッキパーツはすべてピアノブラックに塗装された。さらにヘッドライトとテールランプについてもSTEEL BEINTE プロテクションフィルムを貼り込むこと

↑リムエンドまでスラリと伸びた変則Y字メッシュスポークは、美しさと逞さが共存した唯一無二のデザイン。サイズ以上の大径感を演出し、BMW X7の大柄なボディにも決して負けない存在感を主張する。絶妙すぎるマッチングである。

BMWのフラッグシップSUVとして、確かな存在感を放つX7。威風堂々としたスタイルながら洗練された佇まいは、目の肥えたオーナーを惹きつけてやまない。ただ、優等生すぎるくらいがあるのは否めない。そう、メルセデスなどと比べると、押し出しに欠けるのだ。なにかスパイスを加えたいくなるのもうなずける。

まずはホイールのインチアップでも……という流れになるのも必然だが、せっかくなカスタマイズに踏み切るなら、セオリーに掬われずに攻めの姿勢を貫きたいものだ。さらっと、さりげなく、それでいて誰もが目を奪われるようなフォルムに仕立

で、さりげなくブラックアウト。さらびやかな装飾を一切なくした潔さが、無駄のないシンプルな美しさを際立たせる。そしてボディ全体を引き締めつつ、足元には圧倒的な存在感を与えてみせた。オーナーが指名したのは、ハイパーフォージド「HF-LMC」の24インチだ。サイズはフロント10J、リヤ12Jで、いずれもセミコンケープディスク。タイヤはフロント295/30 R24、リヤ355/25 R24のVREDESTEIN ULTRAC VORTUREを組み合わせた。

純正の2インチアップとなる24インチ。やり過ぎでは? と思えてしまふほどのサイズ選択だが、こうしてボディに収まっているのを見ると、まさにジャストマッチといえるほどのまとまり具合である。



ゆるやかなコンケープを描くスポークが立体感を強調する。センターキャップ付近の駐肉は極限まで削ぎ落とされた。多彩なフィニッシュが選べるだけでなく、ミリ単位のインセット選択ができるのも魅力。自分だけの1本に仕上げられる。

ては絶妙なバランスの上に成り立っていることを理解いただけるはず。ところで、スタイルアップの主役となるHF-LMCについても触れておかねばなるまい。国内最高峰の削り出し鍛造技術により産み出された変則10スポークデザインは、大胆かつ繊細な造形を見せる。Y字型に分岐されたスポークは、優れたデザイン性のみならず、類まれなる強度と剛性を達成。重量級のX7の足元を支えるに相応しい確かな性能を持ち合わせているのだ。

サイズのみならず、多彩なフィニッシュを選べるのも特徴。オールブラックにこだわったこのX7では、ディスク、リムともにあえてブラックシュドアナダイズブラックを選択。さらにピアスボルトについてもブラックをチョイスしている。そこまで徹底すると、せっかくな意匠が沈みがちとも思われがちだが、ベイントに一切頼らないアナライズド仕上げは、光の当たり方により様々な表情をみせる。スポットライトを浴びたかのように、美しいディテールが浮き出してくるのだ。

